

第4章 特論 甲賀の城と甲賀郡中惣

村田 修三

第1節 はじめに

甲賀郡は南に接する伊賀国とともに、単郭・方形・四方土塁・周壕を基本特徴とする、いわゆるお屋敷サイズの城館が濃密に分布することにより、城郭研究者・中世史研究者等から強い関心を寄せられている。地域内に分布する城館がほぼ均質であるという、他地域には見られない分布特性は、城館と在地構造の密接な関係を物語るものとして、研究意欲を駆り立ててきたのも当然のことといえる。これらの城館が最も発達したと思われる時期に、甲賀では甲賀郡中惣、伊賀では伊賀惣国という惣国タイプの一揆権力が形成されたことから、一揆の主体である土豪が家権力ごとに類似の城館を築いて競い合い、また連合して地域秩序を形成したという想定が大方の支持を得てきた。しかし、城館の調査が進み、具体的な分布・立地・縄張りの比較検討が深まり、歴史状況・在地構造との突合せも可能になってくると、城館とその主を従来のように単純に結び合わせることに疑問を懐かせるケースが多々出てきた。

これまで個々の城館の築城主体は、同名中を構成する家々に比定されることが多かった。そのうち主城格の城館は同名中を統べる惣領家に比定されて「某本城」と呼ばれることが多かった。同名中の庶子家の城館と惣領家の「本城」がともに、いわゆる伊賀甲賀型に属して質的な差がないのは、そもそもこの同名中タイプの権力が古典的な在地領主型の領主権力—南北朝内乱期に変革して限りなく大名権力を指向する求心的な権力形態—ではなく、同名中を構成する家々の力が相対的に強く、惣領家を規制して、全体として連合しているという構造に対応しているからだ、と理解されてきた。筆者はこの理解は今でも基本的に正しいと思っているが、これだけにすがってはいられない研究段階に立ち至っていると自省している。

在地領主も大名権力も連合的・一揆的なものから求心的なものまで多様な偏差および変化が認められるように、甲賀の同名中権力にも連合的・盟約的なものから、近隣の弱小な同名中を飲み込む過程で求心的な権力に成長したものまで格差と多様性があつたにちがいない。権力の実体において相互にかなりの格差を生みながらも、地域社会の構造的特質という次元においては伊賀甲賀型城館の再生産からの離脱を許さないような規制が効いていたのかもしれない。その問題は郡中惣の成立ということで納得するわけにはいかない、まだ十分には解明されていない地域史研究上の課題と関わっているように思われる。また郡中惣の成立は最近の研究では時期的にかなり限定されざるをえないようだが、その前段階ともいえるべき連合形態、たとえば複数の同名中による地域的な連合形態が同名中の枠を越えた築城需要を生み出したかもしれないということも予想しておかねばなるまい。それに加えて、甲賀の世界を取り巻く歴史的環境、守護六角氏との関係をはじめ、京都の幕府権力・細川政権・伊賀や大和を介して迫る北畠氏・三好氏などの複雑な影響を考慮すれば、築城の背景には同名中レベルの問題をはるかに越えた複雑な事情があつたに違いない。

本稿では最近の調査・研究の成果の中から、築城事情にかかわって注目すべき事例に触れながら、前述の課題を考えてみたい。

第2節 同名中の城の分布

濃密に分布する城館を同名中の個々の家と対応させる通説的な考えに対して最も否定的な意見を提示したのは中井均氏である。^①氏は旧甲賀町域の和田の谷筋に濃密に分布する城館群を例にして、家々の居住地との対応関係の希薄さと谷筋防衛の軍事的意味の濃さから、曲輪が上下に発達する山城一般に対して、曲輪が尾根ごとに横に発達したケースではないか、つまり和田の10前後の城館は全体で一つの城と評価したほうがよいという理解を示した。私は複数の城の群と見るか単一の城と見るかは城郭論における別次元の議論を呼ぶので保留した方がよいと思うが、甲賀の城の見方を本家分家関係から解き放ったという点で画期的な提言だと思う。

この提言は、諸城館をそれぞれ単品として、私的な家の城、自分持ちの城、個別の城と見るのではなく、一定のグループの中で特定の機能を分担する城、全体の中に位置づけられた城と見るということである。個別の城でなく全体の城と見る考え方自体は、武士団がヒエラルヒッシュに統率された強大な領主権力・大名の場合には、本城・支城関係としてつとに知られた、いわば常識である。しかし同名中を組み替えて惣領家が庶子家を家臣団に編成した形跡が乏しい甲賀武士団の場合は、惣領家の居城を本城、庶子家の居城を支城とよぶケースはあっても、大名権力下の本支城体制とは同日には論じられない。

およそ支城には二種類あって、もともとその地の領主が自分持ちの城として経営してきた城を、大名に服属した証として支城に格付けしてもらうが、元の領主がそのまま城主として居続けるいわば本領支城と、元の城主を追放するか新規に築くかした城に必要な兵員を派遣して守備させる在番支城との、二通りがある。前者の場合は、城の維持管理は城主の存在と即時的な関係、つまり彼が生きることで裏腹の関係になっているので、大名の側は原則として維持管理費用を負担しなくてすむ。しかし後者の場合はもろに経費がかかってくる。ひとかどの武將に城主の役を負わせて入城させる場合も同様である。

顕著な例として伊勢の大名(国司家)北畠氏が一門の木造氏を追放した跡の木造城に大和出身の武將の沢氏を城主として入城させた際の一連の関連文書がある。文亀3年(1503)十月、沢伊予守は北畠具方に「城領条々」^②を提出して、城付きの知行地である城領に事細かな注文をつけたほか、加勢の人数、兵糧、要害人足・諸職人、大和伊勢間通行の過書などなど、数多くの要求を出し、具方はそれに一々合点の印を付け、「何も存知申候」と証判した。城を維持するためにどれだけの物品・経費・人手を要するかが具体的にわかる。沢氏は城主就任を承諾する代償にそれらの負担を大名側に要求したのである。大名がかくも弱腰であったについては、追放した木造氏が京都との関係で厄介な存在だったとか、まとめるためには大和出自の別格の家臣である沢氏に頼るしかなかったという特殊事情が考えられるが、戦国大名として未熟な段階では支城を抱えるのは大変だったという一般的な事情をうかがわせるエピソードである。

戦国大名として成功したケースは、城を預かる武將にその経費まで役として負担させることができた場合である。役を負わせるからにはそれに見合った知行を与えねばならず、そのためには知行制度の整備と知行源の獲得競争に勝ち抜くという厳しい試練をくぐらねばならない。

中井氏が和田の谷筋の諸城で想定した個々の自立性のなさ、すなわち全体の中の一郭として配置されているという性格は、同名中のメンバーの家の城とは思えないという観察から発したものだけに、支城に引きなおしてみると、本領支城ではなく在番支城のケースに相当する。自分持ち

でないこれらの諸城を同名中で維持管理するということはどういうことを意味するのか。惣領家がずば抜けた財力を有して経費を負担したのか。それとも城を預けた同名中メンバーに役として負担させた代わりに知行を給付した、すなわち知行を介する主従制・家臣団編成が進んでいたのか。惣領家が抜きん出た地位を築きつつあったことは疑いなく、後に触れる信楽の多羅尾氏のよう小川城に象徴される戦国領主の道を歩み出したと思われるケースもある。しかし築城に要した莫大な労力の問題をあわせ考えると、惣領家の権力・財力よりも、同名中の共同性・全体性で説明した方が理解しやすい。

同名中の構造をめぐってはこれまで多数の研究が積み重ねられてきたが、地域社会における権力単位として惣領家の権力と同名中の権力のいずれを重視するかが最も重要な論点になってきた。たとえば柏木郷の山中同名中の場合、領主としての領域支配権を握るのは山中家なのか同名中なのか。その点でいまだに解釈が混乱していて残念に思う史料が永禄9年(1566)の「伴・山中・美濃部三方起請文案」^③である。その第2条の「三方領中」は「三方」それぞれの領の中の意味であって、「三方領」の中の意味ではない。「三方領中において、盗人の輩、手前に至り討留むべき事」という条文は、たとえば伴領で窃盗を働いた犯人が山中領に逃げ込んだら山中方、すなわち山中同名中の職権で成敗する、ということである。ところが宮島敬一氏^④が「この三方領中とは、特定領主の一円支配領域を示すものではなく、三方＝三同名中の勢力範囲を示す」「三方各々領中ではなく三方領中である」とされて以後、この解釈がかなりの研究者に継承されて、この決定的な史料が有効に使われずにきたため、甲賀地域における領主権の基礎単位が同名中であるという理解が劣勢に立たされている。史料解釈の要は文脈・流れの中で用語を捉えるところにあり、この史料では「三方」を「三方領中に」・「三方一味に」・「三方同然に」という一連の用法を踏まえて解釈すべきである。

「領」の概念が同名中の次元で用いられているという事実を、多くの研究者が論証している惣領家の庶子家に対する立場の弱さなどと合わせ考えるならば、同名中の世界に領主権の存在を認めるとしてもそれは惣領家でなく同名中の組織に、同名中惣・奉行中惣の体現する場に認めるのが順当だろう。こういう説明だけで長い論争を切り上げる意図はさらさらないが、本稿ではとりあえず次に進みたい。ただここで付け加えておきたいことは、領域支配権の展開の過程における同名中の決定的な位置を重視しなければ、三方中のような複数の同名中が組み合った組織は領主連合一般と、さらに広域に連合した郡中惣や隣国伊賀の惣国一揆は国人一揆一般と区別が付かなくなるということである。国人一揆との共通点はあっても、「伊賀惣国一揆掟」^⑤に記す「上ハ五十、下ハ拾七をかきり、在陣あるへく候」という住民の総動員体制と、甲賀との合力を「野寄合」で決する惣国合議のルールはどの部分の相違から生まれてきたのか。分岐点は同名中に求めざるをえない。

同名中の世界の総動員体制を具体的に伝える「大原同名中与掟条々」^⑥の第6条に「手はしの城江番等入事在之者、各致談合、人数をさし入可申候」と見える「手はしの城」は、最近城郭研究者の間で注目を集めている。同名中の構成員は日常的に「我人」「懇中無音に寄らず」^⑦という相互主義・対等主義に従って行動し、係争事案は両年行事の率いる奉行中が「評判」(評議)して執行し、同名中として談合する際は「多分二付而同心」申すべしという多数決主義に依って運営された。在番支城として同名中の支配下にあった「手はしの城」の軍備・軍略も同じ原則の「談合」によって遂行されたのである。^⑧

「手はしの城」の「手」とは作戦ないしその範囲をさすと思われるので、大原同名中の支配する領の端を防御する城、すなわち境目の城と見るのが自然だろうが、実際は複雑に入り組んだ領において採られた作戦上の端となると地図を睨んだだけで分かるようなものではあるまい。中井氏が問題にした和田の谷の場合にしても、谷の口と奥というように単純には比定できない。前述したような同名中の基本性格からすれば、和田領の城館の多くは通説のような家毎の個別の城であった可能性が高いと思われるが、中井氏が警告したように「手はしの城」がその中に混じっている可能性が高い。両者を縄張りから識別できないこと、それほどに同名中的な伝統に規制されていたことが、甲賀（伊賀も含め）の地域に刻印された特徴だったのである。

第3節 同名中をこえた城

以上は同名中の城の中で、本来的な家々の個別の城と、新たに築かれ出した全体の城を、ともに同名中の構造に関わらせて対比的に考察したものである。ところが最近、同名中の枠の中にも収まりきらない城の存在が注目されるようになった。現在進行中の甲賀市史第7巻「甲賀の城」の調査事業の中でも重要な成果が得られつつある。

旧水口町巖峨地区の西の丘陵、滋賀ゴルフ倶楽部の中に取り残された尾根の一角に巖峨西城がある。ゴルフ場建設時に調査・保存を指導した丸山龍平氏の実測図によって研究者間に知られた。^⑨ 甲賀のどの地区にもある、判で押したような四方土塁・周壕の城である。微細に見れば、虎口前の土橋の脇に空堀が食い込んで食い違いになり、片方の土塁先端が張り出して横矢掛けを意識している。このあたりは戦国末期、後述するような歴史環境をふまえれば、元亀・天正の兵乱時あたりの手になると思われる。

私がこの城を訪れて驚いたのは、城の立地である。麓の巖峨の里を見通す絶好の張り出し尾根のピークにありながらその麓に背を向け、虎口は逆方向の主尾根に向かって開口している。正面は渡り廊下状のスロープを約100m隔てて主尾根に連絡している。虎口の食い違いはこの連絡ルートとうまくかみ合っていたのである。なぜかくもこの尾根を意識して築かれたのか。

調査事業の中で話題になったもう一つの事例を紹介しておこう。内貴地区の東部、みなくち子どもの森の裏の尾根道をたどると、北に野洲川（横田川）を見下ろす高台に北内貴城がある。やはり典型的な四方土塁の正方形の主郭に続いて、不完全に土塁をまわした長方形の副郭が全体で品の字になる形で接続している。尾根道は土橋→主郭内→土橋→片側の（野洲川を見下ろす側の）副郭→土橋の順にたどれる。道を通す側の副郭から野洲川に向かって道が下り、途中に10段ほどの小郭が連なる。

こちらは尾根を意識するどころか、尾根道をしっかり取り込んでいる。尾根だけでなく野洲川とその渡河点を押さえる勢いである。戦略的に大変な要衝に位置していたのである。現在この城は内貴地区に属するので北内貴城と命名されてはいるが、内貴氏が築くには村から離れすぎているし、機能的にも出すぎた行為である。

北内貴城を見た目で巖峨西城を振り返ってみよう。この城が目的とした尾根は西北野洲川畔から東南隠岐集落まで約3.5km続き、旧版の地形図ではこの背に里道が走っていた。巖峨領を越えて隠岐領まで関わった立地であったことがわかる。隠岐は佐治荘として東隣の小佐治以下と密接な関係のある土地なので、尾根を利用した連絡ルートは小佐治に及んでこの地の有力者佐治氏も関わってくる可能性がある。問題の尾根の北端は北内貴城が目的とした尾根続きと稗谷川的地峡

部を挟んで呼応しあっている。両者を結ぶと内貴・巖峨・隠岐・佐治の諸領が連絡しあって野洲川に臨むラインが浮かび上がってくる。

このラインに関わる諸家の名は伝承の世界で荘内三家・北山九家などの地域グループに属したとされるが、呼称は柏木三家（三方）のように史料裏付けのあるものではない。しかし柏木三方に類した連合体が各地区の共通利害に基づいて組織されていた可能性は十分にある。その一つのケースがここに片鱗を見せたのではあるまいか。野洲川南岸ラインを結ぶ形の共通利害となるとかなり軍事に特化したものにならざるをえない。そこから予想される厳しい軍事的緊張状態がピークに達したのは、織田信長の上京＝近江の六角氏支配秩序の瓦解＝大和の松永氏支配の再建と筒井氏の東方後退という畿内政情の激変を見た永禄11年(1568)9月以後である。そこに至るまでも三好政権が分裂して大和における三好三人衆方の筒井氏と松永氏の抗争が伊賀を経て甲賀に及び緊張を強いられただろう。伊賀の惣国一揆掟に見える「三好方へ奉公に出るな」とか「大和大将分（筒井方）の牢人を許容するな」といった表現はこの対立構図を前提にしている。そういう背景のもとで諸種の地域連合がある時一挙に郡中惣の成立に転回した。だから問題のラインに関わる築城は郡中惣の申し合わせ（公権力化の程度によっては政策）に基づいて行われた可能性もある。

郡中惣の政策としてか、そこに至る諸同名中間の地域連合の談合に依ってか、今は決めがたいが、いずれにしても個別の同名中を越えたレベルで城が築かれ機能したことを両城の特徴は物語っている。直接的には最寄りの同名中が築城と維持管理を担当しただろうが、他の同名中も加勢してそれまで以上に短時日に仕上げただろう。同名中のレベルを超えると「手はしの城」の「手」のレベルも変わったのである。然るに、何度もいうが、縄張りの基本特徴は変わらない。甲賀社会の基本構造は郡中惣を生み出しても変わらない。

以上は同名中あるいは同名中間の関係、いずれにしても甲賀衆の利害の枠内で説明できる築城である。ところがその枠もこえるレベルの築城の可能性が指摘されるに至った。本報告書関係の諸城の調査を主宰した長峰透氏は、杉谷・新治（新宮・倉治）地区の主な城に見られる顕著な特徴を、観音寺城落城後の六角氏が甲賀や伊賀を頼って出沒する作戦との関連で評価する立場から発言してきた。^⑩ 当地周辺に勢力を有した望月氏関連文書や伊賀の友田に写本として残る六角氏発給文書群をもとに、六角義治と承禎が望月氏を頼って当地に滞在したこと、さらにその支援によって伊賀まで赴いて、いわば二段階の拠点作りを試みたようであり、その時の築城ないし改修の一部がこの地に遺構として残されたのではないかという説である。杉谷の望月城・望月支城、新治の村雨城・寺前城と新宮城・新宮支城の6城は2城ずつペアになっており、各ペアには主副の差が認められるという分布面での特徴と、次節で述べるような縄張り面での特徴が見られる。加えて当時の甲賀・伊賀周辺の交通路を考えると、私も長峰説は支持できると思うに至った。

六角氏が望月氏を頼って伊賀に退いたことを示す基本史料は『大日本史料』が「木村政延氏所蔵文書」として引用している年欠9月17日「望月吉棟宛義治書状」である。^⑪ 本文は「今度宿之儀頼入候処、別而入魂難忘候、仍郡内之儀、織田可有行之由候而、物忽之間、至干伊賀打越候、雖勿論之儀候、出張之刻、必當屋敷江可入城候間、不相易馳走可為喜悅候、猶高野瀬備前守・柏修理亮可申候、恐々謹言」、すなわち、今度宿泊の件を頼み込んだところ、格別入魂にお世話下さったことは忘れがたく有難かった。ところで甲賀郡内の状況は今にも織田勢が進軍してくるのではないかという噂が立ち、危険になってきたので、伊賀まで退避した次第である。勿論のこと

だが、近く出陣する時は、必ず貴殿の屋敷へ入城させていただくので、相変わらず力を貸して下さい。という文面である。謝礼と依頼に加えて感状を兼ねた書状である。望月屋敷(城)を出発する時にあわせて書いたのではなく、伊賀に到着してから発給したと理解した方が自然である。

この史料は『大日本史料』の永禄11年9月12日条に採録されている。すなわち観音寺城落城の記事である。12日に箕作城落城、翌13日に観音寺城を攻められ六角父子は城を捨てて逃亡した。綱文には「六角承禎父子、観音寺城ヲ棄テ、尋デ、伊賀ニ奔ル、」とある。観音寺城落城直後の一連の行動として伊賀入りを位置づけている。この解釈の根拠となったのが問題の9月17日の書状なのである。この9月17日ははたして永禄11年なのか。^⑤ 同条に採録されている他の記録では逃げた場所は三雲・石部・鯉江とされる。いずれも蓋然性はあるが、伊賀は無理ではなかろうか。13日から17日までの4日間で近江の懇意地を通り過ぎて伊賀までたどり着くとは。敗軍の将を受け入れる話は旅程だけでは済まないはずだ。

問題の文面をふりかえってみよう。六角義治がいったん望月城に入って宿泊したことは、「當屋敷」と呼んでいることから間違いない。この場所で織田方の動静を検討し、危険だと判断して出発し、伊賀に落ちてから状を認めた。その日付が17日。手回しよく伊賀の宿の手配が出来ていたとしても、観音寺落城から4日目は日程的にきつすぎる。それよりも重要なのは文面から読み取れる状況である。近江の某所から難を避けて甲賀の望月氏のもとに来て滞在、甲賀も危なくなれば、望月氏の仲介で予め定めていた伊賀の某所に引っ込む、そこで機会を窺って出発、望月城に再入城して軍勢を整えて近江の中原へ出馬、これが出張(出陣)である。「不相易」の表現がなくとも、こういう没落と出張がすでに何度か繰り返された後の話とすれば文面は自然に受け取れる。

落城直後でさえなければ望月氏らの奔走によって伊賀の何処が引き受けるのかといった話もまとまる。数年経てば伊賀の拠点作りもかなり進むだろう。伊賀における支援体制をうかがわせる史料が北伊賀の友田に伝わっていた。^⑥ 年欠10月2日付の「伊賀 河合山内」宛六角承禎書状写に、「今度石部館に籠城した際、入城して粉骨したのは神妙であったので、以前に宛行った知行に加増して目録を以て扶持する」とあり、この目録に相当する同人宛「知行分目録」が天正元年(1573)10月2日の日付で伝わっている。だから河合山内氏が六角勢に加わって甲賀の石部城で戦ったのも天正元年とわかる。河合山内氏と同族と思われる友田山内氏に宛てた年欠9月21日付の承禎書状には「今度音羽に至り相越し候の処、路次送りならびに種々機遣い共懇意の段相忘るべからず云々」とあり、承禎が戦いに敗れて伊賀の音羽まで落ちのびてきたのを、友田山内氏が路次送り、つまり供奉・警護して来たというのである。この敗戦は河合山内氏が参戦した天正元年の石部合戦の可能性が高い。^⑦ 二つの書状の11日間の隔たりは問題にならない。この頃になると音羽に六角方の拠点が設けられていたことがわかる。問題の望月吉棟宛書状もこの頃の可能性が高い。

長々と望月宛書状を詮索してきたのは、望月氏が六角氏を迎える体制が整うのはいつ頃かという見当をつけたかったからである。通説のように書状の年代を永禄11年とするのと天正元年近くまで下ろすのでは、わずか4・5年の差とはいえ、元亀天正の兵乱という疾風怒濤期における城郭史の急展開をふまえれば、城の評価に大きな影響を及ぼす。とくに甲賀の場合は天正元年の石部城の戦いを最後に、六角氏を擁立しての戦いは終わり、急速に信長政権下に吸収されていくので、城の歴史は織豊系城郭の展開へとテーマも変わることになる。地域的伝統に即した築城の

舞台は伊賀に集約されることとなる。

さて、観音寺城を脱出した六角父子が落ち延びた先は石部か三雲だろう。とくに三雲氏は六角氏の重臣として甲賀武士の中では別格だったから、確率は高い。また三雲の裏山（比高180m）に三雲城がある。この城は信楽の小川城とともに甲賀にはあるまじき（高さ及び四方土塁タイプでないという点で）山城で、主郭の虎口を大規模な石垣で整えた風格は六角氏を迎えるために用意したとしか考えられない。この城から尾根伝いに、湖東平野と信楽盆地をつなぐ峠に出ることができる。この峠を南から見通せる山城が小川城である。紫香楽宮とその背後を守る金勝山と飯道山の聖地が形作る景観は古代以来大和から近江へ抜ける街道のアクセントになってきた。六角氏もこのコースを意識して反信長戦線の構図を描いたことだろう。ちなみにこの道を国境の朝宮までたどると畝状空堀群を伴うことで甲賀にはあるまじき山城・朝宮城がある。^⑤ 私はこの城の縄張りの他の特徴も勘案して、これは松永氏が関係して成ったとみている。ここからはほぼ一直線に恭仁京を経て南都に至る和東道である。その喉元を押さえるのが松永久秀の鹿背山城である。反信長戦線の両策略家がこのルートで繋っていた。その途中を支援したのが多羅尾氏であろう。小川城から朝宮城を見通せるのは偶然ではあるまい。後述する望月ルートの結節点の聖地岩尾山も小川城から見通せる。このように見通しのよい山城は全国的にも比類がない。城郭立地からも多羅尾氏は同名中の世界から抜け出ていたといわざるをえない。

元亀2年(1571)8月の大和辰市の合戦で松永久秀が筒井順慶に敗れた時点で和東信楽ルートへの松永方の影響力は失われたとみてよい。時期的にどのように前後するかは定かではないが、三雲周辺が安全地帯ではなくなってくると、一步奥地の甲賀武士を頼んで拠点作りを意図する。そのとき中心になって奔走したのが望月氏であったのではなかろうか。守護大名佐々木六角氏と甲賀武士団の伝統的な関係から、観音寺落城直後に諸家が同名中ぐるみで動き出しただろうが(伊賀の一部も相応に連動したはず)、落ち武者をかくまうのとは次元の異なる反抗作戦の基地作りの構想・実施となると、郡内の意見調整にも手間がかかり、まずは下郡^⑥で三雲中心に、次いで奥の上郡で、と試行錯誤したある段階で望月中心の作戦と城郭ネットの構築になっていったのであろう。直接上様を迎える場作りだけでなく、前述した野洲川南岸ラインに片鱗を見せたような地域防衛事業も平行させねばならないので、城造りには長けた甲賀衆にとっても空前の築城ラッシュだったにちがいない。

望月氏の勢力圏の杉谷地区は、安全な山間を岩尾山（息障寺）の麓の峠を越えて伊賀国の槇山に至る岩尾越の起点に位置する。槇山から南下して友田・河合一族の勢力圏へ、そこからさらに西へ入れば、隠れ国伊賀の中でも極め付きの隠れ里・音羽である。音羽城は三雲城に似た石垣造りの虎口を誇る山城だが、この虎口以外は未完成という思わせぶりの城である。槇山から西へ折れると平坦な地峡をつないで多羅尾氏の膝元に出る。甲賀衆を頼る六角氏にとって最も頼りがいがあるのが望月氏だったといえる。

第4節 望月氏関連の城館の縄張り

【遺構位置については望月城・望月支城は第4図、寺前城・村雨城は第13図、新宮城・新宮支城は第19図を参照】

前述したように主副ペアになるのが特徴の諸城のうち、基準になるのが杉谷の望月城と望月支城のペアである。遺構の詳細は長峰氏担当の本文に譲るが、土塁の高さ、周囲の防御の仕掛け、

虎口の工夫などで、望月城の方が望月支城を上回っている。これは年代の新しさを物語っているとみてよい。その年代が築城なのか改修なのかは発掘を待たなければ結論は下せない。しかし土塁の外周の空堀D・Fは通例の周壕とは形状がかなり異なる。Dの西北隅の部分が異常に張り出しているのはGとかみ合って武者隠しの機能を与えられているからである。少し南へ進むと通常の深い空堀になるが、西南隅から東へ向かうFの範囲は再び狭い武者隠し状（これだけ長い武者隠しは近代用語を借りて塹壕と呼ぶ）になって、東南隅でカーブしてBを見下ろす部分は典型的な武者隠しである。通常の周壕は遮断機能優先だから深ければ深いほどよい。ところがこの城の場合はことさら狭く浅く仕上げられている。外堤が崩れたり後からこういう形に改修したのでないことは全体の地形の寸法を計算すればわかる。だからこの城は新規の築城だったことがわかる。街道の分岐点を押さえる要衝の地だからもともと物見のような施設はあっただろうが、大規模な築城によって消し飛ばされたにちがいない。

ところが以上の説明だけでは納得できない箇所がある。空堀Dの南半分は通常のように、いやそれ以上に深く急峻に掘りあげられているではないか。これはこの部分が裏山からの尾根続きだからである。通常の尾根続き遮断の場合はこれだけでいいが、この城の場合は前述したように堀底は武者隠し（塹壕）の続きだから外壁の上から覗かれては困る。そこでその奥を掘り切った。そういうわけで掘り残した3の部分が壮大な土塁となり、これがまた防御施設（櫓台機能）となって裏側の防御力を押し上げたわけである。

この城には本文で述べられているように、他にも様々な防御の工夫があり仕上げも立派で、甲賀ではトップクラスである。かつてない軍事的緊張下で急いで、しかも念入りに築城したことが窺える。南隣の望月支城の方が方形館としては風格があるので、こちらが本来の望月屋敷だった可能性がある。六角の上様を迎えるにあたって、立派な御殿よりも安全と秘密の方が優先されるので、要塞然とした強力な構えの望月城が新築されたのだろう。六角義治にとって新城・旧城の区別はずかり知らないことなので、ただ「當屋敷」とだけ記したのである。密接に呼応し合う位置にあればお世話する上でも便利だし、いざ合戦になった場合は望月家の面々も新城の方に移って（時間的余裕があれば上様ご一行は他の城に移して）戦うことができる。両城連絡しあって同時に戦うと（別城一郭の構え）、長所と短所を補い合って相乗効果を生むことが期待され、伊賀・甲賀で群集タイプが多いのもそういう経験則に基づくと思われる。しかし戦法が進歩した戦国末期では、ただ並べるだけでなく連絡の仕方にも工夫が求められる。望月両城の場合には工夫がみられない。

別城一郭云々よりも、六角氏を迎えるのに伴って異種の軍勢が混じるので持ち場を分ける必要が生じる。他の大名・国人の大規模な山城なら曲輪によって区別すればよいが、伊賀・甲賀型の城は基本的に単郭構成の城である。たとえばこの望月城の場合、Ⅰに対してⅡ・Ⅲの曲輪があるが、予備的に付随しているだけである。周辺の同類の城館にこのような段築が多数付属する例は多いが、殆どは麓に展開する同名中関係者の屋敷が高い位置に上っただけで、とくに防御されてなく、どこまでが城なのか常に議論になる。望月城のⅡ・Ⅲも最下の斜面が急峻で切岸として効いているから城内と判断できるのであって、裾部の破壊がもっと進んでいたら判断は難しかっただろう。こういう次第で、甲賀の場合、異種軍団がうまく協力するための場の設定は、城自体を別に設けて、両者を連絡しやすいように互いに寄せるという仕方に落ち着いたのである。甲賀衆以外の軍勢が戦闘に加わってくるという経験は上郡では初めての経験である。ペアタイプが望

月城周辺で目立つのも偶然ではなかったと思われる。

六角氏を迎える体制作りとしては、直接上様を住まわせる望月城だけでなく、周辺を防衛する城郭網の整備が必要になる。竹中城の土塁の強化のように既存の城の改修も行われたが、それだけでは十分ではないので、新規の築城も試みられた。そのうちのたしかな事例が新宮(新治)地区の二つのペアの4城であったとみてよい。

杣川沿岸の盆地の西奥に位置する望月城を守る最適の場所に4城が位置する。杉谷地区の東をカバーするように南北に走る丘陵の西側、杉谷を見通す位置に寺前城と村雨城が、同じ丘陵の東側、杣川沿いの中心的な村々を見通す位置に新宮城と新宮支城が位置する。前者の場合、地形の上から、村雨城を主城にしてその前備えが寺前城になる。

村雨城は本文で指摘されたように、地形を持て余して未完成に終わっている。なぜそんな無理を犯したかという、望月城に関連して述べた主郭の下に続く諸段について、全体が有機的な構造の縄張りになるようにメリハリを付けようと、最新の情報として得た織豊系城郭の得意技、嘴状に張り出した土塁挟みの虎口(最近学界では外枳形概念を使用)を先端に設けようと試みて失敗したからである。同じ試みは時代が下って土山城などでもっときれいな形で成功していく。もう一つの試みは、やはり望月城について指摘した、二つの城をただ並べるだけでなく、うまく連絡させるという課題である。北の寺前城との間の丘の背に曲輪Ⅳを設けて、空堀を介して南北を一体化するという試みである。単純に考えると、空堀が間に入れば遮断されて連絡できないじゃないかという疑問が出されよう。しかし中世の山城は全般に空堀で遮断し合いながら全体が一つの有機的な構成を保つように工夫されてきたはずである。連郭式山城が中世城郭の主流になったのがその傍証になる。具体的にどうやって深い堀切を越えたのかわからない場合が多いが、進んだ城では木橋を架けた跡が調査された例がある。たいていの城では橋を架けずに、城兵だけに出るような仕方で越えていたとしか思えない。遮断と連絡という相矛盾する側面を折り合いつけて両立させられたのは、土の城のお陰だと言うしかない。とにかく問題の両城に見られた空堀を介して一体化させるという手法は、同じ風土の伊賀で大規模に試みられるようになる。ちなみに伊賀は甲賀より遅れて天正7、9年のいわゆる天正伊賀の乱で築城のピークを迎える。

丘陵の東側の両城のうち、新宮支城は比類のない大規模な土木事業に挑みながらあと一歩というところで未完成に終わったことが本文で指摘されているが、それゆえに問題の疾風怒濤期に手がけられたことも確かになった貴重な遺跡である。完成したのは北の新宮城である。村雨城で指摘した下段の曲輪との一体化の試みは、Ⅱ郭の先端の枳形状虎口に認められる。一体化されたのはⅠ・Ⅱ郭だけで、残りの数郭は地形に従って段築されている。東端のⅤ郭の切岸はよく効いて平地に対して城内のけじめを付けているが、北脇の小谷に面するⅥ・Ⅶ郭の切岸は弱い。

近接する二つの城をペアにして使う試みは、今回の望月氏関連のものだけでなく、大原同名中連合に関わる櫛野の滝川氏城・滝川西城にも見られる。広い外延部を城内に特定する試みのうち、最も新しい形式を採用した例は油日山崎の上野城に見られる。上野城では長大な土塁ラインで未整形の平坦地を囲みこんでいる。^⑩ 総構えの発想を伝え聞いて早速取り入れたようだが、まだうまくこなれていない様子である。このように甲賀上郡の中心部では新しい工夫を凝らした築城が急速に広がった模様である。織田軍団と遭遇しての危機感の現れである。そのいわば目玉になったのが杉谷・新治地区の城館群であった。

第5節 おわりに

甲賀の地域社会の構造的特質に根ざした甲賀独自の城造りは単郭方形四方土塁の館城に象徴される。同名中を構成する土豪層がそれぞれの屋敷を発展させた館城の競合の過程で、基本的な縄張りが伝統として固定される。それは文化的な景観となったといってもよい。戦国期の社会発展と軍事的な外圧は地域の政治構造の変化とそれ相応の軍事的対応を求めた。それは顕著に城造りに反映したはずだが、文化の一環に組み込まれてしまっていた古典的縄張りが付いて廻ったために、遺跡を観察する我々の目には識別することは困難になっていた。同じ形式の城館と見えても、伝統的な個別の城と新しい状況に対応した全体の城の別があるということに学界が気づいたのはつい最近のことである。今後は急速に識別が進むだろう。しかし識別できてもその基礎に甲賀の歴史的伝統という共通項のあることを忘れないという注意も同時に必要である。

註

- ① 中井均「戦国社会と土豪居館」（中井均・仁木宏編『京都乙訓・西岡の戦国時代と物集女城』文理閣 2005）
中井均「村の城を探る」（『城郭フォーラム 甲賀・伊賀の城 講演録』甲南町教育委員会、2004）他
- ② 稲本紀昭編「沢氏古文書」（『京都女子大学研究叢刊』43）29号
- ③ 「山中文書」235、本報告書史料編
- ④ 宮島敬一「戦国期における在地法秩序の考察—甲賀郡中惣を素材として—」（『史学雑誌』87-1、1978）宮島説は三方の領を領主の領と次元の異なる領域とみてどのレベルにおいても領主的存在を認めない。結果的に私の主張に近くなるので、以下の論述での批判対象ではない。
- ⑤ 「山中文書」386、本報告書史料編
- ⑥ 「大原勝井家文書」、本報告書史料編
- ⑦ 「懇」の文字の崩しは「悪」のそれに酷似するので、この掟を最初に紹介した石田善人氏以来「悪中無音」と読まれてきた。これでは意味が通じない。親しい者も疎遠な者も分け隔てなく、という意味に解してこそ同名中の掟にふさわしい。ちなみにこの「懇中無音」という慣用句は戦国期の掟・起請文の類にしばしば見られる。
- ⑧ 政権論にたとえるなら共和制になるが、侍身分に限定されるので貴族共和制、しかも一般住民には市民権が与えられないので、凡下・百姓にとっては恐ろしく息苦しい世界だったかもしれない。しかし百姓はしたたかに百姓中を組織して同名中と対抗した。野洲川を下るとこの関係は逆転していた。
- ⑨ 丸山龍平「水口町巖峨所在の巖峨山城跡考」（『近江の城』27、1987）
- ⑩ 前掲『城郭フォーラム 甲賀・伊賀の城』現地見学会資料他
- ⑪ 『大日本史料』第10編—1
- ⑫ 石田善人氏は『万川集海』解説で同文書を引用して「観音寺城を棄てて甲賀郡に出奔して土豪望月氏を頼り、やがて伊賀に脱出する。」と記し、この文書が永禄11年だとは明記することは避けながらも、同じ逃避行での出来事と理解している。
- ⑬ 『三国地志』巻3 伊賀国舊案。『阿山町の古文書資料』第2集（阿山町教育委員会）に写真が掲載されているので読み違いを訂正した。
- ⑭ 『三国地志』の編者も天正元年と断じている。
- ⑮ 朝宮城の畝状空堀群は高橋成計氏によって発見された。詳細は『甲賀市史』7で紹介される予定である。
- ⑯ 信楽を除く野洲川流域の甲賀郡は現甲賀市域の上郡と現湖南市域の下郡に区別する土地感が地誌類から窺える。
- ⑰ 残念ながらこの土塁ラインは県道建設によって失われた。

《引用・参考文献》

- 村田 修三「戦国時代の小領主－近江国甲賀郡山中氏について－」（『日本史研究134』1973）
久留島典子「中世後期在地領主の一動向－甲賀郡山中氏について－」（『歴史学研究10』1981）
石田 善人「甲賀郡中惣と伊賀惣国一揆」（『史想21』1962）
石田 善人「甲賀武士団と甲賀忍術」（『万川集海』解説 誠秀堂1975）
宮島 敬一「戦国社会の形成と展開－浅井・六角氏と地域社会－」（吉川弘文館 1996）
高木 昭作「甲賀郡山中氏と郡中惣－小領主の性格規定のために－」（『歴史学研究325』1967）
千田 嘉博「村の城をめぐる5つのモデル」（『年報中世史研究16』1991）
木戸 雅寿「甲賀の城のネットワーク」『紀要第19』（財団法人滋賀県文化財保護協会 2006）
中井 均・福井 健二「村の城を探る」
（『城郭フォーラム 甲賀・伊賀の城 講演録』甲南町教育委員会、2004）
「近江輿地志略」寒川辰清 弘文堂書店 1976
「近江蒲生郡志」蒲生郡役所編 1973
「甲賀郡志」甲賀郡教育会 1971
「水口町志」水口町志編纂委員会1960
「甲南町史」甲南町史編纂委員会 1966
「望月町誌」望月町誌編纂委員会 1994
「三重の中世城館」三重県教育委員会 1976
「菊永氏城跡発掘調査報告書」阿山町遺跡調査会 1987
「滋賀県中世城郭分布調査報告書」2（甲賀の城）滋賀県教育委員会 1984
「滋賀県中世城郭分布調査報告書」3（旧野洲・栗太の城）滋賀県教育委員会 1985
「県道柑子塩野線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書 竜法師城・池ノ尻遺跡」
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2006
「植城遺跡発掘調査報告書」滋賀県教育委員会 2006
「小川城発掘調査報告書（Ⅰ）」信楽町教育委員会 1978
「小川城発掘調査報告書（Ⅱ）」信楽町教育委員会 1979
「補陀楽寺城遺跡」甲賀町教育委員会 1996
「上野城跡発掘調査報告書」甲賀町教育委員会 1989
「甲南町内遺跡詳細分布調査報告書」甲南町教育委員会 1998
「甲賀市内遺跡発掘報告書」甲賀市教育委員会 2005